

# 生活の伝承 25

発行者 民家園のつどい  
会長 太田 隆夫  
発行所 福島市五老内町3番1号  
福島市教育委員会文化課内  
民家園のつどい事務局  
TEL(024)535-1111 内線5373

## お盆の行事

—思い出すまま—

太田 隆夫

七月十三日 盆棚つくり

の持山からでも自由に切ってきた。これを自分の家の井戸尻や桶などに水を入れて保管しておいた。

### 七日盆 墓掃除と「盆箸採り」

七月七日には「たなばた」の籠飾りを 大根の種子を蒔いた畑に送る。大根がうまく育つて 秋の豊作につながるという。

それから それぞれの墓地に行つて草を刈り、墓石の周囲の地面を掃き清めてた。各家の墓地の掃除が終わるころ 皆んなで墓地への道路を整備することも 集落の通例になっていた。

そのあと男の人たちは近くの小川へ行つて土手の柳の木の新しく細い枝を切り採ってきた。

枝の表皮をむいて水で洗つて 屋敷や物置の下屋の柱に 繩で何回か巻きつけ、曲がりを直し これをお盆期間中の「盆箸」とした。

それから十三日の前日（宵盆）までに 各家では「盆花」を採集してきた。キヨウ、オニナエシ

その他の花を 近くの山へ行つて採つてきたが 誰

胡瓜の馬 ナスの牛の脚は この柳の枝の細いと

棚に四角の板をのせ、盆ござを敷いた。  
横に渡した若竹に 素麺、杉葉 こんぶ（わかめ）  
五色紙 ささげなどを飾り 左右の細い柱に ほ  
うずき 車駁を下げた。

盆棚の中央上部に位牌を安置し 線香立て 鈴（りん） 燭台をのせる。（位牌でなく 太い青竹の花立てをつくつて ここに盆花を挿すところもある これが「お盆さま」と称する）

それから七日に採つてきておいた柳の枝を「盆箸」につくる。盆棚に一膳分供え それから家族の人数分をこしらえた。十三日から十五日の夕方までの盆の期間、家族みんなはこの「盆箸」を用いて食事することにした。

ころを四本づづ挿し 盆棚に供える。さらに「バス」の葉を小さくし 洗い米にササギとナスを細かに刻んだものを混ぜた。「あらよね」も盆棚に供えた。これはお盆の一番の「ご馳走」といつていた。

盆棚の前の左右には 盆花の花瓶をおき それから「盆提灯」を棚にさげたり 脚つき提灯は その周りに配置した。

去年のお盆の後に亡くなつた人がある家では(新盆) 竹竿か杉の細木の先に「燈籠」に杉葉をつけた「高燈籠」を庭先に立てた。新しいお盆さまが 家に戻つてくるとき迷わないよう他所より高い目印をこしらえて案内するのだという。

十四日には「臼餅」をこしらえる家 また「ぼたもち」をつくる家があり それぞれに盆棚に供え お墓参りにも これを持参して墓前に供える。このとき「あらよね」を必ず供えることとした。

墓参りには、ご先祖さまの数だけ この日までに作つておいた 新しい青竹の「花立て」と盆花をお供えした。死者の数だけの「花立て」は 二十本も三十本の家もあつたので、お盆の墓参りは その家では一大仕事だつた。

また自分の家の墓だけでなく 同じ場所にある本家、分家、親類の墓地、代表的な一ヶ所へも 青竹の「花立て」と花を供えた。

十三日の夕方の日暮れ前には それぞれの家から墓地へ 枯れ松葉 枯れ杉葉 麦わらを持参し そこで火を焚いて迎え火とした。そのまま家に戻つたら 屋敷の水場(池や井戸端)でも火を焚き さらに座敷の盆棚が見える庭先に 枯れ松葉などを燃やした。

水場での迎え火は お盆さま(ご先祖)が天国から戻つて来たときに足を洗つてもらうため 庭先の迎え火は あそこに見える棚が ご先祖さまが 三日間お座りになる場所と指し示すための「明かり」だといつている。

迎え火は十四、十五日の朝と夕方同じように水場と庭先に四回焚くことについていた。遅れて来るご先祖もいるからとされた。「お盆礼」は正月の「ご年始」の挨拶と同じ性格があつて迎える家の主婦にとつては大きな接待役となつた。

のことから俗稱として「盆、盆と暮らすお盆はただ二日いらざるお彼岸 七日もあるに」という言葉は 親類が次ぎから次ぎに訪れてくる忙しさについ嘆きたくなる状況を表したものといわれる。

十五日は 前日に白餅をこしらえた家では「ぼたもち」「ぼたもち」を食べた家では「白餅」とした。十四日と同じように「お盆礼」に訪れる客もあれば まだ墓参り済ませない人はこの日に盆花と供物を持参して墓へ向かつた。

この日までに親類まわりを済ませていない家では 当日夕方までに「お盆礼」に出かけていた。だから家の主人が留守でも訪れる「お盆礼」の親類には その家の主婦もしくは息子が（嫁も）相手となつて接待した。

### 十六日 送り盆 盆おどり

この日は朝早く、盆棚に供えた 素麺 こんぶ(わかめ) あらよね その他を胡瓜の馬、ナスの牛の背にハスの葉に包んで

結びつけ 盆花とともに「盆ごご」にくるみ 川へ流しに行く。

ほかのお盆さまと遅れることないよう心がけて川へ向かつた。川へついたときには 線香に火をともし 無事に天国（極楽）へ戻れるように合掌した。

それぞれの家で供物を川へ流したあと 供物をくるんでいつ

た「盆ごご」の端の一方を必ず川の水に浸すことにして帰った。確かにお盆さまを川へ流し 天国（極楽）にお送りしたことを見すことだつたという。

その後座敷の「盆棚」を解体し、骨組みの細い木、板をひとまとめに縛り 来年のお盆に備えた。

この十六日はまた「地獄の釜の蓋のあく日」ともいわれ、仕事を一日休みとする土地もあつた。

またこの十六日は各地で「盆おどり」が催され 若者たちが胸おどらせ楽しみに出かけて行つた。

※「お盆礼」のときの嘆き言葉に、「盆、盆と暮らすお盆はただ三日 いらざるお彼岸 七日もあるに」というのほか「お盆お盆と待ちたる三日 いやな彼岸が七日もある」というのもあると聞いた。

## 吾妻大権現

加 藤 重 芳



平成二十五年吾妻地区の史跡探訪行事で、吾妻郷土史談会（会長阿部美作）から在庭坂字姥堂に吾妻大権現があるとの情報を得て現地を訪ねてみた。

現地は市内唯一の「姥堂」から三百米程の山中で須川の崖上で山の合間からわざかに小富士の頭が見えようか、という所謂、

遙拝所ではないかと思はれる所である。

石を積んだ高さ二米、幅一・五米、奥行き一米程の石室で、中央に吾妻大権現の石碑、脇侍として向かつて右に不動明王、



左が小午田山神の文字碑で、右は吾妻大権現の石碑がある石室

左に役の行者を配した三尊型となつてゐる。年号等はない。左隣に高さ二米程の「小午田山神」の文字碑が立ち、右脇に「發願主當村条作」左脇「弘化四年二月」「石工当村義作」とある。

「吾妻大権現」とは神仏習合の山岳信仰で慶應四年三月信仏分離令によつて廃止され、尚又廃仏棄釈の運動によつて権現・大明神・神明・山王等はすべて神社に改替されたので、ここに残されていたのは意外であつた。

佐原・覚寿院は、本尊神変大菩薩（役行者）と不動明王で吾妻院と称していた。渡利・八幡院は、本尊不動明王で小午田山神を奉じて、安産・子育ての利益ありとして市内に信者が多かつた。共に天台修驗である。

資料叢書四十五輯福島の仏堂明細帳（昭和六十年）の解説で大村三良先生は

「庭坂の姥堂の本尊は俗にいう「おんばさま」で三途の川の辺りで罪人の衣をはぎどる奪衣婆であり、吾妻大権現登拝の入口（旧道）を占める本堂は今は姥神社とされているが境内には石仏・石碑が多く建立されている神仏習合の修驗が開いたものであつうが民間信仰ではこれを縁結び、子育て、と自在に受けとつてゐるのである」と解説されている。

この時吾妻大権現の存在が判つていたら又違つた解説をなさつたのではないか。

# 旧奈良輪家と『道の記』

星 隆

戊辰戦争も終盤に入つた慶應四年七月末、二本松は激戦に入ろうとしていた。二十八、二十九日には壮絶な二本松少年隊の戦闘もあった。しかし西軍の洋式訓練と新式の軍備に対し勝利は望むべくもなかつた。二十九日、藩主丹羽長国は米沢に逃れ、二本松城は落城した。

これより先二十七日夜、長国夫人の久子は家臣の進言によつて城を脱出、米沢への逃避行が始まつた。寝入つた娘たちを起こし、わずかな供を従え輿に乗つての避難であつた。真夜中の十二時過ぎであつたといふ。

明治に入つてから、この逃避行の模様を久子は『道の記』という手記に書いている。

それによると、夜陰にまぎれて二本松城を出た夫人一行は、夫人と娘の峰子、きく子、くみ子、それに従者たち、『ふたもとの松のやかたを夜すがらに／あとも見なしてゆくぞかなしき』という旅立ちであった。二本松城を抜け出した一行は宮下で休息をとる。宮下は油井の智恵子生家の西北八百メートルほどのところ。そこから水原へと向かつた。奥州街道ではなく裏街道

を歩いたのであらうか。水原で朝食をとり、先発していた先代藩主夫人らと合流した。

水原から大森へと向かつた。昼ごろに大森に着いた。『道の記』によれば「秋の日なればみじかくて早や程もなう午の刻にも成侍れば大森とかいふ所のいと狭き宿に着き侍りて午餐などしたためしに。をさな子らの夜すがら歩みけるまま疲れはてけむいと心地よげにやすみけれど……」起こして大森を出立した。

平成十六年、千葉県市川市に住む伊藤彰曹さんという方から、資料展示室（ふれあい歴史館）あてに旧奈良輪家についてのファックスが届いた。伊藤さんは昭和五年に御倉町に生まれ、環境工学を専門とする工学博士である。

それによると、お母さんが旧奈良輪家の元持主だった野地本家の出身だつた。野地本家は士族だつたが、明治維新後の大改革の影響を受けて、代々続いた家屋敷を奈良輪家に譲つた。明治三十二年生まれの母親が八歳の時だつたといふ。伊藤博士は母親から聞いたといふ話を次のように書いている。

「野地家の当主（曾祖父）は、敵の追つ手が来ても、普通の百姓家のように見せかけるために、部落の衆を招集して、屋敷の回りの空堀に、奥座敷の鎧櫃の中の、鎧や剣類を投げ込み、その上を土で平らに盛りました。姫の泊まられた奥座敷は、普段は使わない特別な接客に使用する部屋で、姿見（鏡）があり、

姫は米沢に旅立たれる時に、使われたそうです。その時姫はお礼にと、着ていた振り袖の両袂を切り、野地家の当主に与えました。後に曾祖父は二人の娘（母の叔母達）が、嫁ぐ時に家宝として、それぞれ持参させました……」

伊藤博士に伝えられた話では、久子夫人が姫に、午餐が宿泊

したことになつていて、いざれにせよ旧奈良輪家（野地本家）に立ち寄つたことは間違いないだろう。また太田隆夫さんの第四詩集『有為の奥山今日も越えて』によると、この時、大森で世話をした一人に太田さんのお祖父（祖父の祖父）がいたという（詩「遠景の片隅—戊辰戦争血縁的断章—」「謎めいた墓碑銘」）。

この日の目的地は庭坂の清水寺であつた。大森からの道は荒川を越す。渡し場があつたが舟はなかつた。やつと荒川を渡るとまた渡し場があつた。

「又も渡しの在りて日もはや暮るゝばかりになるに。たゞ一すじの丸木橋ありて輿にてかよひかぬるをやうやうに渡りぬ。心々に神仏のみたすけをいのりぬるみかげにや」皆人々さはりもなくてうちこえける」

ようやく清水寺に着いたのは午後八時を過ぎていた。

一夜明けた七月二十九日午前十時ころ、南の空に煙の上がるのが見えた。お城が焼けおちたのだろうと久子は思つた。庭坂

の清水寺から一本松の煙が見えるのかどうかは分からぬが、事実このとき一本松城は自ら放つた火によつて燃え上がつていた。二本松落城であつた。

李平、板谷と泊まつて、米沢に着いたのは八月一日の夜だつた。

米沢には二ヶ月あまり滞在した。帰りは木々の色づきが濃くなつた十月十六日、米沢を発つて大沢、庭坂と泊まつて、十八日に桜本村名主宅で赤飯などの馳走を受け、ふたたび須川を越えた。帰りには板橋がかかっていた。あるいは五厘橋であつたろうか。大森ではまた昼食になつた。これも野地本家—旧奈良輪家であつたのかもしれない。





## 第7回フォトコンテスト

第7回フォトコンテストにおいて、民家園関係の写真が4点入賞しましので、ご紹介いたします。

特別賞



「縁先談笑」毛利 周一さん（伊達市）



入選

「いろり囲んで昔話」  
古関 喜典さん（福島市）

入選

「伝統を伝える」  
相田 勝仁さん（福島市）





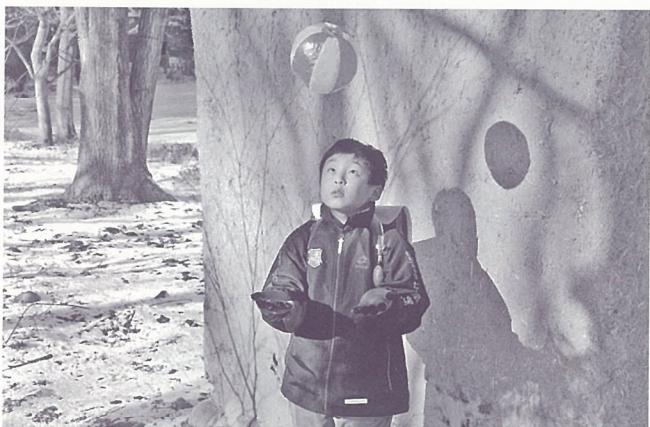
入選

「やさしさ」  
武田 幸吉さん（国見町）



入賞

「小正月」  
丹治 美知夫さん（福島市）



佳作

「民家園で遊ぶ」  
原田 和夫さん（伊達市）



佳作

「母の願い」  
清野 善男さん（福島市）